

象は、地震、津波、旱魃、大洪水、害虫の大発生など、自然界が人間にもたらした苦難を禍として捉えるものである。共同体を襲うもので、「われわれはなぜこのように苦しまなければならないか」という問を喚起しやすい。通常の人間の「合理的」理解を超えたような現象に対する宗教的解決が問題になる。

神道の自然災害についての表象を考えていく上で、もっとも適切な対象は祝詞である。古代より現代に至るまで一定の觀念・信念が複製されてきているからである。神道では禍が起るのは必然的と考えられている。禍(枉)津日神という存在は、禍をもたらす神である。しかし、ちょうどヒンドゥー教で破壊の神・シヴァが神々がなすべき基本的働きのなかに取り込まれているように、必然性があるて存在し、なくなることはない。また善悪二元論における悪のように滅ばすべき対象でもない。災異に際しても祝詞が奏上される。祝詞には災いに對し、これを予防したり、事後の清めとして行う内容のものがある。大祓祝詞と呼ばれるものは、年二回行われる大祓の際に奏上される。罪・穢れの発生は必然的と考えられている。災異に対する祝詞もその枠を出ない。これを仮に「禊・祓ミーム」となづけ、二重過程理論を適用させてみる。禊・祓ミームはまず分析的システムにはたらくが、場合によってTASSにも影響を及ぼすという図式が想定される。祝詞を通して「禊・祓ミーム」は、人々の脳にコピーされてきたと理解することになる。

このような観点から自然災害の神道的表象を分析していくことは、従来の宗教史的アプローチや、宗教社会学的アプローチ、とくに機能主義を援用したアプローチとどう関係づけられ

るであろうか。もっとも議論を呼ぶものは、ミームという視点を本格的に取り入れルユニバーサル・ダーウィニズムと呼ばれる立場にどのように対処するかであろう。ただ、受け入れるにしても、批判するにしても、人間観についての根本的な見直し作業を経ることは避けられない。

アーネスト・サトウと国学

遠藤 潤

明治初年の在日欧米人の神道理解はどのようなものだったのか。今回の報告では、外交官として、不連続ではあるが幕末から明治十年代まで日本に滞在してさまざまな記録を残したアーネスト・サトウをとりあげ、この問題について考える。

サトウが神道について述べた文章のうち、最も重要な論文に *The Revival of Pure Shin-tau* (一八七四年後半に *Japan Weekly Mail* に連載、翌七五年に *Transactions of the Asiatic Society of Japan* に収録) がある。これは荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四人に代表される流れを *the revivalist school of pure Shin-tau* (純神道リバイバル派) として把握し、その概略を描こうとするものである。

その前段階をなす問題意識は、萩原延壽が指摘したように、論文 *The Shin-tau Temples of Ise* に関して行われた日本アジア協会 (*the Asiatic Society of Japan*) のメンバーによる議論に現れている。宣教師をはじめとする日本アジア協会の欧

米人メンバーが、神道を religion として把握する困難をさまざまな面から指摘した。神道に道徳律がないこと、とりわけ神道の最重要文献と目される『古事記』に道徳の体系や倫理的問い、儀礼、神についての崇拜対象としての扱いなど、彼らが religion の要件と考えるものがことごとく欠如していると認識されていた。これらの論点をサトウなりに受けとめ、純神道リバイバル派を対象として神道の religion たる性格を再度考えようとしたのが、Pure Shin-tau 論文である。サトウは、のちに国学で「四大人」と定式化される人々の動きを純神道の revival (信仰復興) ととらえる。記紀や万葉集、古語拾遺、祝詞には純神道の研究者に有益な資料がそれぞれ別個に含まれており、彼ら四人はこれらを研究したいわば先達と理解している。サトウによるこの四人の選択は、全体の構想が篤胤の枠組みに依拠したものであることを示す。論文の内容は、四大人を順次紹介していくものであるが、実際の記述には宣長や篤胤の著書の祖述的な部分が多くみられる。むしろ、大半は紹介と要約であるとさえいえる。ただ、篤胤を論じた末尾の部分では、『玉櫛』に含まれる諸神に対する拝礼と言葉を記した神拝式を紹介した上で、神道の religion としての性格をいかに見出す。サトウは、篤胤が神道の基礎に立脚したひとつの religion を確立しようとしたと把握するのである。

結論では、四人の学問について神道という religion の正しい理解かどうかは判断しないと断った上で、方法について考察する。純神道を説明するためにサトウが必要と考えるのは、神代に関わる資料について聖書解釈や神話解釈が経験したような

複数の資料を相互比較しつつ歴史的批判を行うことである。「四大人」の学問にもそうした方向性がある点を評価はしているが、古代の記録を絶対確実することや奇跡や超自然的なものに立脚している点に方法的な限界があるとする。サトウは、神道は religion として把握できないという理解を修正しつつ、しかしインサイダー的な視点には批判的な態度をとるのである。

これまで、サトウの神道に関する知識の源泉については、日本語教師をつとめていた林甕臣が想定されてきた。甕臣は確かに明治三年に平田門に入門している。ただ、サトウとの実際の期間の長さや関係の密接さから考えると、幕末から気吹舎と関係を持っていた薩摩藩の関係者に注目すべきであろう。サトウと親交のあった西郷隆盛は、嘉永年間から気吹舎に出入りしており、西郷自身の入門はないが、薩摩藩関係者が複数入門している。薩英戦争の際にイギリスとの交渉にあたった岩下方平もその一人で、安政年間の入門である。サトウが、彼らを通じて平田学の知識や書籍を入手していた可能性は大いに考えられる。

近代日本における大祓詞の解釈

鈴木 一彦

本研究は、生命主義的思想との関連で、大祓詞などの古典の実証研究を通じて、神道における始原的本質としての呪術的宗